

1.17→3.11



(c)2010NHK



(C)MBS

1.17 から 3.11 へ、そして・・・。—回復(レジリエンス)するカー



1月19日(土)

2010 / 日本 / 83分 / トレースフォーマー
監督：井上剛
脚本：渡辺あや
出演：森山未来 / 佐藤江梨子 / 津田寛治

その街の子ども 劇場版

対談

ゲスト：渡辺 あや さん (脚本家)

聞き手：中村 正

(立命館大学産業社会学部・
応用人間科学研究科教授)



2月16日(土)

2012 / 日本 / 115分 / いせフィルム
監督：伊勢真一
出演：苫米地サトロ / 吉田圭 / 苫米地花菜 / 苫米地麦生

傍—かたわら 3月11日からの旅—

対談

ゲスト：村本 邦子 さん

(立命館大学応用人間科学研究科教授)

聞き手：中村 正

(立命館大学産業社会学部・
応用人間科学研究科教授)



3月9日(土)

南三陸町 人々の一年

2012 / 日本 / 99分 / MBS
監督：森岡紀人
プロデューサー：井本里士
出演：宮城県南三陸町のみなさん

生き抜く 南三陸町 人々の一年

対談

ゲスト：井本 里士 さん

(MBS 毎日放送「VOICE」編集長)

聞き手：団 士郎

(立命館大学応用人間科学研究科教授)

この公開講座は、映画が表象する「関係性の様態」を読み解きながら、「人間と社会の現在」について考える機会にしたいと願い企画されています。上映後の対談や講義と合わせて、映画の持つ“時には奇想天外で、たまには刺激的な、どちらかといえば胸騒ぎのする発想”に学びつつ、私たちの視界を広げる試みとして位置づけています。

講座終了後、ロビーにておいしいコーヒーをお出ししております。憩いのひとときと共に、講師や聴講された皆様で交流を深めていただきながら、結論のない、あるいは結論がひとつでない、対話の場としての「シネマ人間学」をじっくりと楽しんでいただければと思います。

鑑賞料：一般 600円
京都シネマ会員 300円
立命館大学生・教職員 300円

時間：13：30 開演 (13：00 から開場)

《対談》15：30～16：30

(上映時間により多少異なります)

会場

立命館大学朱雀キャンパス 5F 大講義室(ホール)

JR 二条駅、地下鉄東西線二条駅 徒歩 5分

駐車場・駐輪場がございませんので、ご来場は公共交通機関をご利用下さい。
満席の場合、ご入場を制限させていただくことがありますのでご了承下さい。

朱雀シネマCAFE

対談後、会場ロビーにて
おいしいコーヒーを
淹れています！



みなさまと交流を
深めながら、
カフェタイムで
憩いのひとときを♪

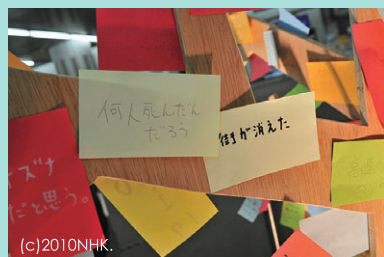


PRODUCED BY CAFE PHALAM

「朱雀シネマCAFÉ」は地元のCafé Phalam様にご協力いただいております。

阪神淡路大震災の前後に生まれた人たちはもう少しで成人となります。まだまだ若いです。でもずいぶんと時間は経ったようにみえます。回復や復興とは何かについて世代を超えて、世代を繋げて考えることができるほどには時は経過しました。当時の子どもだった現在の若者は神戸の回復（レジリエンス）をどうみるのでしょうか。そして3.11です。もうすぐ2年となります。生き抜くこと、傍らでできること、がんばること、悲しむこと、話し続けること、忘れないこと・・・すべきことはまだまだたくさんあります。1.17と3.11をつなげ、回復（レジリエンス）という言葉とともに、予想される次の大震災の日（未来）のことも視野に入れて考えつづけていきたいと思えます。

1月19日(土) その街のこども 劇場版



(c)2010NHK.

1995年1月17日午前5時46分一。「街」は一瞬で破壊された。

子どもの頃に阪神・淡路大震災を経験し、今は東京で暮らす勇治（森山未來）と美夏（佐藤江梨子）。

ふたりは追悼の集いを翌日に控えた神戸で偶然に出会い、震災15年目の朝を迎えるまでの時間を共に過ごすことになる。復興を遂げた真夜中の神戸の街で、これまで語り合えなかった二人の想いが、不器用にあふれ出そうとしていた。

実際に震災を体験した森山未來と佐藤江梨子の切なくリアルな演技が観る者の心を揺さぶる感動作。

ゲスト：渡辺 あや（わたなべ あや）さん

兵庫県西宮市出身。島根県在住。
2003年に映画「ジョゼと虎と魚たち」で脚本家デビュー。映画「メゾン・ド・ヒミコ」「天然コケッコー」「ノーボーイズ・ノークライ」、テレビドラマ「火の魚」「カーネーション」などの脚本を手掛けている。
阪神淡路大震災時はドイツにいたが、西宮の実家が被災。その経験を元に本作を書いた。

聞き手：中村 正（なかむら ただし）

立命館大学教授

2月16日(土) 傍一かたわら3月11日からの旅



吉田浜の美しさに惹かれ、ここに住み着いたシンガーソングライターの苫米地サトロ。10年前にこの浜が作らしてくれたのが、「君は泣いているだろうか。僕は泣けるようになったよ」という歌詞がある「満月」だ。震災で床下浸水したが、幸い家も家族も職も失わずにすんだ。妻の吉田圭などと共に、町に臨時災害放送局「FM あおぞら」を立ち上げ、月命日に亡くなった人々の名前を読み上げる。

カメラマン宮田八郎が友人の苫米地サトロの安否を尋ねるため被災地に入ったのが撮影のきっかけとなり、低いカメラアングルから被災者の一年を追ったドキュメンタリー映画。

吉田浜の美しさに惹かれ、ここに住み着いたシンガーソングライターの苫米地サトロ。10年前にこの浜が作らしてくれたのが、「君は泣いているだろうか。僕は泣けるようになったよ」という歌詞がある「満月」だ。震災で床下浸水したが、幸い家も家族も職も失わずにすんだ。妻の吉田圭などと共に、町に臨時災害放送局「FM あおぞら」を立ち上げ、月命日に亡くなった人々の名前を読み上げる。

ゲスト：村本 邦子（むらもとくにこ）さん

立命館大学応用人間科学研究科教授。臨床心理学、女性学が専門。女性のトラウマへの対応、戦争加害・被害によるトラウマの世代間連鎖と平和教育の実践的な研究に取り組んでいる。対人支援や臨床心理を対象とする研究科の特長を活かして「東日本・家族応援プロジェクト」を立ち上げ、東北各県で子育て、家族相談、子ども支援などに10年かけて持続的に取り組もうとしている。災害とそこからの回復について時代の証言者としての役割を果たすことを試みる新しいタイプの心理学者である

聞き手：中村 正（なかむら ただし）

立命館大学教授

3月9日(土) 生き抜く南三陸町人々の一年



(C)MBS

大阪・毎日放送（MBS）の取材班が、東日本大震災の被災地となった宮城県南三陸町を津波襲来の48時間後から1年間にわたり取材したドキュメンタリー。

ふだんマスコミが報じきれない「顔の見える被災者の静かな思い」を伝えるため、それぞれの被災者たちに深く寄り添い、厳然たる現実と町の人々の見せるさまざまな感情を克明に映し出している。

1年間通して記録したテープは800時間にも及び、その記録から被災者一人ひとりの素顔が浮かび上がってくる。

ゲスト：井本 里士（いもとさとし）さん

MBS毎日放送の報道局ニュースセンター「VOICE」編集長。どこよりも速く、どこよりも深く、どこよりも丁寧に伝えることをポリシーとして、報道一筋、常に第一線で社会全体の出来事に関わってきた。
本映画のほかにも自身が制作した『映像90 薬害ヤコブ病』が第41回日本ジャーナリスト会議（JCJ）奨励賞、第6回坂田記念ジャーナリズム賞を受賞するなど、良質なドキュメンタリー作品を手がけている。

聞き手：団 士郎（だんしろう）

立命館大学教授



主催：立命館大学

共催：京都シネマ

企画協力：立命館大学人間科学研究所

協力：トランスフォーマー／いせフィルム／MBS

企画コーディネイト：中村正（立命館大学産業社会学部・応用人間科学研究科教授）

お問合せ先



立命館大学 社会連携課

TEL：075-813-8247 FAX：075-813-8167 E-mail：cinemas@st.ritsume.ac.jp

URL：http://www.ritsumeihuman.com

〒604-8520 京都市中京区西ノ京朱雀町1番地